



聖観世音菩薩像 1887(明治20)年
 高さ117.3cm 樹高(台座込み)129.1cm 素材:木、竹、和紙など
 ●写真提供:松本喜三郎顕彰会

生人形師 松本喜三郎作 聖観世音菩薩像 修復終わる。

去る10月18日に熊本市春日の来迎院にて、仏師浦徹学さんの手によって修復された、聖観世音菩薩像の開眼式が行われました。
 昨年より松本喜三郎顕彰会(会長島田真祐さん)と、来迎院「聖観世音菩薩像」保存会を中心に進められてきた修復、保存運動は、多くの方々のご厚意で実を結ぶことになりました。



生人形師松本喜三郎
 文政5(1825)-明治24(1891)は井出ノ口(現在の埴町)生まれ。写真嫌い、脱髪を以て65歳までちよん髪でした。

●「せふたーんぶる展 四(一九七〇)〜九(二〇〇〇)」。出品者五名のグループ展。水彩、水墨、パステルなどの作品が並ぶ。和島弘士さんの(女神)は、アメリカ国旗と白鳥の女神を組み合わせたデジタル出力の作品である。西面左下に「Gibbs's Bird」の文字と記入されるが、複製ゼロとイメージが誰なり腐々しい思いがつの。(H・T)

●「一人の手で楽しいね」展 中国風洋装の物使い(一九八〇)〜二〇〇〇。竹で編んだ籠、椅子、食器、調理器具など素朴なものごとなく洗練された仕様が並んだ。
 ●「アンダールシアに憧れて」内藤謙一(スペイン)&ホルトガル・スケッチ(一九二〇)〜二〇〇〇。ペンと水彩による作品で、滑らかな空と雲を移やかに描いている。スペインの強烈な太陽の日照しよりも、影の青みや水面に揺れる光のプリズムに心奪われ、丁寧に克明に描き出している様子。(H・T)

●「島田通化による」おとなになれなかつた弟たち(一九九二)が開催された。熊本市子ども劇場連立会の例案である。米倉百加年の同名著作を原案に、スライドでその図版を使用し、時にエモアも交えながら、国・思想を問わず若者男女全てを苦しめる悲劇としての戦争を描き出していた。(H・T)

熊本県立劇場
 Kumamoto State Theatre

ART DE GYAN
 アート・ギャン

11001.カ.一.九.三〇のキヤラリ

●「一筆の会展一九一〇〜一九二〇」が開催された。空岡晃さん、村上禮子さん、大西和子さん、高田マチさんの四人展。空岡さんは、風景、人物を新穎に表現。村上さんの絵は、幻想的で、やさしい色使いが印象的。大西さんは色感がよく、シンプルな画面が目玉。高田さんは対象を抽象すると同時に立体的に把握。それが個性的な作風に表れていた。

●「一筆の会展一九一〇〜一九二〇」が開催された。空岡晃さん、村上禮子さん、大西和子さん、高田マチさんの四人展。空岡さんは、風景、人物を新穎に表現。村上さんの絵は、幻想的で、やさしい色使いが印象的。大西さんは色感がよく、シンプルな画面が目玉。高田さんは対象を抽象すると同時に立体的に把握。それが個性的な作風に表れていた。

●「小山佐野作展(二〇〇一)一九九六〜九二〇〇」。昨年、第五回小磯良平大賞展で大賞を受賞した。天草出身の小山さんの個展。現代の大都市が抱える病をテーマに、生命体のように有機的にうねるビル群を、画面いっぱいに描く。高層ビルが震てしなく揺動していく光景は、おながるる想ではない。小山さんの絵を見るたびに、自然と心なるのは、際限なく増殖していく私たちが自身をまよせまよせと見せつけられるからにはかならない。(K・K)

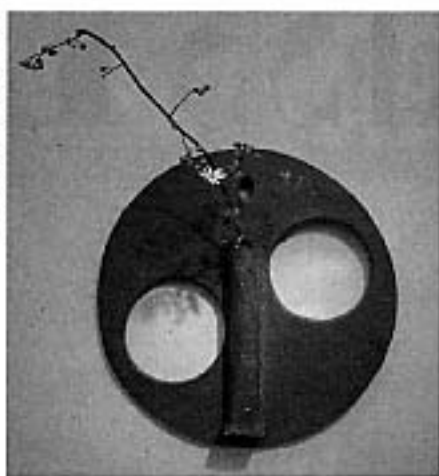
●「下田るみ絵画展(一九二八〜一〇九)」。オーブンング記念に詩人の平岡由紀さんによる詩の朗読や合唱などが行われた。下田るみさんの作品の中で「コンジ」は、暖色系の色の効果的な組み合わせによって目を引いた。また、出口文枝さん(出展)、山本キーさん(山本幸志のティーカーツ)などが展示された。(H・T)

●「高橋由紀展」(九・四・九・一〇)

●「近代日本画会」(九・二・九・一七)

●「九谷・五彩の美」山中国産作陶展(九・十・八・九・二四)が開催された。精緻な絵付けが、見事に、遠くからは緑色の水玉模様に見える松模様を施した絵柄に、筆の跡が極まる。洗練された美を見せつける。

●「吉田 作楽展」(九・二五・一〇・二)が開催された。備前焼の陶器、食器もいろいろ、特に花器に目をひかれた。「コロンとした形、ボカンとした口の開き方が、素直な気持ちにさせる。それほど主張する色でも形でもない。だからこそ、かもしれないが、何を生けようか、花を飾ろうよという器だ。(K・K)



吉田 作楽さんの作品「花器」

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3-97-1F 電話326-4123

●「和紙はあぢやん八四歳」一針一針二二五年の刺繍展(九・四・九・一〇)が開催された。林和紙さんの、植物や人物をモチーフにした刺繍の展覧会。夫を亡くされた後、ご自身の病氣とも闘いながら、刺繍をはじめた。美しい清少納言の刺繍は五〇色の糸を使って作り上げている。

●「航空機写真愛好会SKI STREAM」(九・十二・九・一八)は、会員が一年間熊本空港周辺で撮影した航空写真の展覧会。熊本空港開港三〇周年を記念して、会員の写真がポストカードになったものを来場者に配布した。

●「熊本大学教育学部付属小学校職員展」(九・九・九・二五)が開催された。子ども、児童、動物など、思い思いのモチーフを、自由に描いて楽しめた。あつた。写真から感じた結晶、作者なりに再表現され、自分なりに楽しむ油絵を提案する。また

すべてのキャプションに小さな顔写真がつき、作者のひとりとりに親しみを感じた。権田生菜さんの「ペトド」(写真)は、広大な空間を生かす生活と描いた作品で、作者は決して背伸びをせず、自分のできる範囲で十分に描きこんでいる。また職員会員の佐藤裕子(小・二〇〇二)も、一人一人の特徴が的確に表現され、楽しい作品だった。こんな先生たちがいる学校は羨ましい。(K・K)



西山多隆子さんの作品「A知物」(4才)

画廊喫茶三点鐘

熊本市千草町3-8 有明ビル 電話326-3040

●「第三回かめぐる会」展(九・一・九・一〇)は、ドリルを鉛筆に持ち替えた熊本在住の歯医者さんの絵画展。風景、人物を中心とした油彩十六点が並ぶ。待合室に飾れば、診察前の不安も、穏やかにしてくれそうだ。

●「第三回」天然記念物水前寺ノリ発生地」を守る熊本の風景色紙チャリティー展(九・十二・九・二二)は、三原産物のチャリティー会館の一期、熊本在住の作家が、江戸津浦や同様に意匠をこめて、収益は「水前寺ノリ保存会」へ。(A・S)

●「日常装デザインチャリティー」小島展(九・二二・九・三〇)は、折り紙、給付した田、人形、押し花、写真、Tシャツ、バッグなど個性豊かな小物を展示。初日から好評で展示場もいっぱい。日常生活を楽しくする「思いが溢れている」。(H・T)



小島多隆子さんの作品「A知物」(4才)

スペースレインボー

熊本市駅前1-0-7(シャワー通り) 電話324-0387

●「B・D・DESIGN POWER」展(九・一・九・九)は、熊本で活躍するグラフィック・デザイナー十三人の展示。市内各所でお馴染みのデザインやシンボルマークの制作者が一堂に集まるだけに、非常に洗練されたハイレベル。また、一般への作品アドバイザーや、企業向けのデザイン相談会を行う姿勢に感服。



B・D・DESIGN POWER 展 展示風景

●「押花アート作品展」(九・十二・九・一七)は、西田留美子さん指導の自宅教室「J・押花の会」くまもと社会福祉センターの生徒さんの作品展。日々、夕しに開いた本の頁に忘れていた押花をみつけた。懐かしい光景が眼の前に広がる。(A・S)

●「近づく感覚遠ざかる常展」(九・九・九・一四)は、出品者十三名のグループ展。原野子さんの力強い大画面の風景画と、した拍象画や、長崎康雄さんの光と色彩をコントラストとして見せる作品など、各々の思考と趣向のバリエーションの向き加減の違いを交した。(H・T)

画廊喫茶南風堂

熊本市北本町3-13 光輝ビル 電話343-8004

●「創芸会熊本支部創立十二回小島展」(九・一・九・一〇)は、今年で創立六〇周年を迎える同会メンバーによる二〇点。宮崎安信さんの「夜景」は、闇に溶け出すような柔らかな光の光が、道行く人々の影を優しく包む。それを口実に今宵もまた東路が通のさきで。(A・S)

の影を優しく包む。それを口実に今宵もまた東路が通のさきで。(A・S)



宮崎安信さんの作品「夜景」

●「清水公民館絵画サークル作品展」(九・一・九・一〇)は、坂井栄盛さん指導のメンバーによる二四点。絵の飾られた店内は、野球中継、高談、世間話と様々な音に満ちている。にもかかわらず、ほっとさせぬ静寂に包まれているのは、皆負負わす。好きなものを抱いているからだろうか。(A・S)

●「花のいろいろ」(宮崎一写真展) (九・二・九・三〇)が開催された。幻想的な切り口で撮影された花や風景などの写真が展示された。(K・K)

ギャラリー萌

熊本市水前町8-27-20 電話383-7001

●「第三回くまぐる会」SKIN展(九・一・九・一四)は、サンライフ熊本の絵画サークルのメンバーによる油絵二〇点。お昼時に訪れた店内では、五人の女性が顔の運び方について談笑中。絵の中の一色を使うと締まっていいね(二)でもうちは合わんなあ(三)の地の色だと暗いかもしれない「我が家に飾るとしたら...」という視点は、素朴だが大切。(A・S)

●「フェアトレード」二〇〇一年秋冬新作展示(九・一七・九・二九)は、いわゆる南北問題や、ポストコロニアル問題の渦中の諸国の衣服、工芸品等を直接取引する団体フェアトレードの展示。Tシャツのアクセサリ、バッグや色合いの美しい衣類、雑貨など繊細で美しい。(H・T)

熊本県立美術館分館

熊本市千草町2-18 電話351-8411

●「第五六回県展」(九・四・九・九)は熊本県美術協会による公募展が本館と分館の二会場で開催された。今年から分館で洋画以外のものを展示しており、自由な作風の作品の数々をゆつくりと鑑賞することができた。



有能孝昭さんの作品

●「第六七回県展」(九・一・九・一六)では、一回点が出品され、その半分は熊本県在住の方の作品である。濃厚な色彩で仕上げられた作品が大半を占めていた。(Y・H)



山口 洋さんの作品「船下橋」

●「第十九回道徳法区全五〇人展」(九・一八・九・二二)は、日原全友の書画、川俣沢石さんの指導によるかなや調和の作品五六点を展示。川俣さんは、山頂火の匂を調和体の濃墨と力強くまとめている。河田三和子さんは、百葉集の四首をかたの酒壺で、潤滑をまかしてうまく表現している。山下静雨さんは、西行等の和歌四首を細くするといかなで変化をつけている。(S・K)

●「バードカービングと水彩画展」(九・一八・九・

二四) パードカービングにおいては藍色、彫刻、舞台装置など手の込んだ作品が並んでいた。水彩画も彩色に細やかな心使いが感じられた。

●「キヤノンクラブ熊本支部第六回写真展」(九・一八・一九・二四)。一九名の力作が並んだ。松本詩菜さんのあとかたづけは、広大な棚田の風景の面白さとその土地に抱きしめられているような、癒し人の小ささの引き立つ構図が面白い。

●「第九回熊日本画教室作品展」(九・一八・一九・二四)。さつちり指さ込んだ作品、個性的な作品文相の「(註)」を思わせるが半ば怪物的な雰囲気には仕上げられていて興味深い。

●「第二回RKK学芸部美術展」(九・二六・九・三〇)。水彩画やパステルなど思い思いの画材によって身近な植物・風景を描いている。戸田祥子さんの子供(白)は、無心に絵を描く子供が描く、パステルのやわらかい色調が子供の肌目細やかな肌と柔毛を思わせる。(H・T)

●「熊本県芸術会役員展」(九・二六・九・三〇)。熊本県芸術会が主催する「熊本県芸術展」の理事理事賞、役員賞、準会員賞の各賞が各一点を出展。県内外で活躍する各団体のリーダーをほぼ網羅している。レベルの高さと、書体・書風などの表現様式に变化が見られる。斬新な試みもあって楽しい。(T・M)

●「第十一回巡回日本画展」(九・二六・九・三〇)。山田昌興、華花、人物、果物など思い思いの画題を選び、小品はものかたちを捉えるクロスアツツで、大きめの作品は画面構成に取り組むなど課題がはっきりしている様子。青木政憲さんの「白紙」は、餅の黄味がかった白と背景のグレイのコントラストが目玉を引く。

●「ワールドプレスフラワー協会熊本県支部」(九・二六・九・三〇)。なんといつても目をひいたのは白田清子さん、小椋京子さん、村崎翠美さん、岡川美代子さん、松本広美さんによる合作だった。豊饒な海のなかに表現されているのだが、見立ての意匠を凝らした「野菜屋」である。扇画が人形、空気の泡はオクラや金柑の輪切り、水母はレタスとモヤシで表現される。制作者のユーモアや創意が溢れ溢れている。(H・T)

●「熊本市YMCAフリースペース」
熊本市新町1-2-1 電話096-17555

●「三浦洋一展」(八・二八・九・一〇)は自立の匠ひまわり(一)の開田一周年を記念して、デザイン顧問である三浦さんの展覧会を開催。百号の抽象画三枚とドローイング六点を展示。中でも動きのあるグレーの構成が印象的であった。(Y・H)

●「ジェイ」
熊本市水道町8-9 電話096-2288999

●「水墨画展」(九・一・九・一〇)は日本文化サークルで平山さんのもとに学ぶ十三名が出品。山嵐の深遠さを表現した清田房子さん、からすうりを均整のとれた構図で描いた大和サヤ子さん、雪の降り積む日の静けさを捉えた池田弘子さんらの作品が目玉を引いた。

●「アトリエKUKO作品展」(九・一・九・一〇)は今村真子さんに学ぶ六名のアメリカン・チャイナ・ペインティングの作品展。絵の流行を表現のため、二・五回構成を重ねるといふ。小椋京子さんの描くブルーベリーなどは、すっきりとした線で空間を生かしている。(Y・H)



作家の今村真子さん

●「カルトンス建築部美術展」(九・二・九・二九)。座像や様々な静物を画題にして、ものかたちを捉え、それを記号化しさが表現されていた。(H・T)

●「アートギャラリー「L'AMANOZO」」
熊本市上通町4-1-4 電話096-4721

●「ヨーロッパ版画展」(八・二七・九・二四)は、オーナーの大森さんのコレクションから、これまでもあり紹介された色調で独自の構成をみせている。またキヤノンも「イメージ」で作成され、絵画作品の世界をさらに広げている。(Y・H)

●「ギャラリーキムラ」
熊本市水道町3-5(下通カビル内) 電話096-2700666

●「白藤栄樹・道徳の芸術展」(九・一〇・九・一六)では六〇年後半から近年の「カラー」の作品を展示。刻まれた色調で独自の構成をみせている。またキヤノンも「イメージ」で作成され、絵画作品の世界をさらに広げている。(Y・H)

●「熊本イラストレーターズクラブ展」 数字からイメージするイラストレーション(九・一七・九・二三)は、熊本在住のイラストレーター八人の展覧会。寒い国の童話を想像させる坂口芳枝さんの作品や、ステッチをきかせたバッグに仕上げた森川尚美さんの作品、またウルトラマンをモチーフに楽しいイラストレーションを試みた吉原尚子さんの作品など、八人はみなそれぞれに個性的で強烈な魅力を放っていた。こういった展覧会での自由な仕事は見ていて楽しい。今後も継続を期待したい。(K・K)



熊本市水道町の作品

●「高木書房社中知書堂いけばな展」(九・四・九・一六)は今回「福」をテーマとした。六年ぶりの展覧会は、高木さんのもと、NHK文化センターとプラザ文化センターで学ぶ方々が出品。藤田香倫さん、松尾香明さん、岡本香保さんの三人による「HABATAKI」は波動的な感じられる作品である。(Y・H)

●「第七回パッチワーク・キルトスタジオMARRI-KO作品展」(九・二八・九・一〇)はパッチワークのタペストリー、バッグ、ぬいぐるみ、装飾品を展示。型紙やキットも販売していた。色の組み合わせや、ドラゴンアイ(万華鏡の一種)を思わせるモザイクのような色彩の効果が面白い。(H・T)

●「御船製菓子三人展」(九・四・九・九)やきものつけしが入り口に。土の味を生かした窯変の見られる素朴なものと、青磁にピンクの模様模様が映える器などの展示。

●「一畑製菓作陶展」(九・四・九・九)。あすなる窯は瓦尾市の投資施設で、花器や陶などの展示。

●「乾太郎窯の作陶展」(九・四・九・九)。楳の葉と雲による結業は明るい真鍮色の肌を作り出す花器、燗など。

●「工房有紗」花の作陶展(九・一・九・一六)身近な草花をモチーフに始付けした焼き物の展示。

●「一畑」地球にやさしい家具職匠佐藤の大川漆器展(九・一・九・一六)。桐、樟の筆筒など家具の展示。

●「伝承匠師山田信雲教室作品展」(九・一・九・一六)。仏像彫刻の教室展。細密なさがねを飾った作品など。

●「熊本市伝統工芸館」
熊本市千歳町3-35 電話096-49930

●「山中八洲興」山中良行木彫二人展(九・五・九・一六)。会場に入ると木の香が心地よい。種子島出身で鹿児島島の兄弟二人のおささ四〇点の展示。虫や擬人化した動物などをモチーフに八洲男さんは口を大きく開けて笑う姿、良行さんは微笑、いずれもユーモラスで暖かい作品である。

●「第一回加藤豊久作品展」(九・二・九・一七)。志野の茶器や花器など。

●「色彩のリズム」岩間浩二油彩展(九・九・九・一五)。薄く溶いた絵の具を画面に置いてカートマツクな形を作り、魚や花などと組み合わせて、華やかな色使いで表情的な表現を作り出す。明るく繊細な表現が心地よい。

●「入道園三小宮康孝細見登兵衛作品展」(九・二・九・一〇)。小宮康孝の江戸小紋と細見登兵衛の絹帯の展示。(K・T)

●「自然素材の展覧会」阿部 淳展(九・一八・九・二四) ●「くまもとの漆芸家九人展」(九・二六・九・三〇) 熊本在住、熊本出身の漆芸家九人がそれぞれ伝統の技法と新しい試みの作品を作り出す。見ごたえのある展示であった。

●「くまもとの木工師十一人展」(九・二六・九・三〇)。熊本で作り続ける本工作家十一人の出品。工芸の用之美と遊び心が楽しめる展示であった。

●「富田薫」一人の手ひねり陶展(九・二・九・一六・九・三〇)。江藤繁紀・中村要子さんの作品展。(K・T)

●「本日瑞草」社中展(九・五・九・一〇)。書家の本日瑞草さんが教える二〇人と、本日さんの作品六点で約五〇点を展示。湖上毛筆の詩や自叙歌などを近代詩文書で、蘭書や軸で見せている。作品は自分の好きなことを選んで、緻く繊細な用筆で書いている。書具もモダンで作品とよくマッチして美しい書展となっている。(S・K)

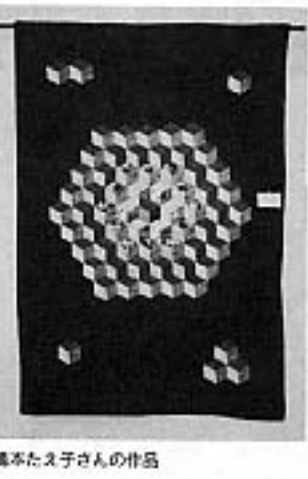
●「原色花教室展」(九・一・九・一七)。晴窓の他、しおりやはがきなど、ひとり一枚の試作コーナーもあって賑わっている。

●「染色展」(九・一・九・一七)。花はな華(九・一・九・一七) ●「第二〇回記念熊本ステンドグラス展」(九・一・九・一〇)。硝子さん、硝子馬さんらのグループの作品展。様々なデザインのステンドグラスのスタンドが会場を華やかに彩っている。美しい配色と強かな作りで魅力溢れる光を演出する。(K・T)

●「熊本市役所職員第三〇回文化展」(九・二・九・一〇)。美術展(絵画・写真・絵更紗)。絵更紗では五月節句をテーマにした田中真代さんの作品が紋に黒帯も交えて風土性を表し、写真では美しい四季折々の風景の作品が多い中で、松本一俊さんの「路地裏」が、おいた人達が楽しく路地で話しかけながら花を吹かせる様子を描き、どこにでもありつつ、しかし心に残る瞬間を切り取っていた。また各々の流派の特長際立つ華道展・小原流清和会・小原流一圓会・真生流、囲碁フェスティバル、将棋大会、茶席、アマチュア無線、吟詠発表会、総後狂句など行われた。(H・T)

●「熊本市役所」
熊本市千歳町1-1 電話096-22111

●「熊本市役所職員第三〇回文化展」(九・二・九・一〇)。美術展(絵画・写真・絵更紗)。絵更紗では五月節句をテーマにした田中真代さんの作品が紋に黒帯も交えて風土性を表し、写真では美しい四季折々の風景の作品が多い中で、松本一俊さんの「路地裏」が、おいた人達が楽しく路地で話しかけながら花を吹かせる様子を描き、どこにでもありつつ、しかし心に残る瞬間を切り取っていた。また各々の流派の特長際立つ華道展・小原流清和会・小原流一圓会・真生流、囲碁フェスティバル、将棋大会、茶席、アマチュア無線、吟詠発表会、総後狂句など行われた。(H・T)



熊本市水道町の作品

島田 真佑さん

この連載では、熊本にお住まいで、様々な芸術ジャンルで活躍されている方々に、制作活動における熱い思いを聞かせていただきます。第4回目は、島田美術館館長の島田真佑さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／1940年熊本県生まれ。早稲田大学大学院日本文学専攻修士修了。熊本県文化財保護審議会委員。著作に『島は修験の野に』（前日文学賞）、『戦後近世人物誌』など。

—— まず、島田美術館の成り立ちについて教えていただけますか。

島田：昭和52年に私の祖父島田真富が92歳で亡くなりました。祖父は熊本城頭彰会常務理事や宮本武蔵彰会会の会長を長くしていました。在野の有職故実の研究者と聞いていいでしょう。その生涯関心を持って収集してきた古物を、保存・公開をしようと思ったのがひとつのきっかけです。法人が出来上がったのは没年の秋で、今日のような新館が開館したのは昭和58年です。日本の中・近世美術工芸が中心ですね。

—— 宮本武蔵の美術館としても全国に知られていますね。

島田：宮本武蔵に関連する品は僅かですが、日本の近世美術を考える上で確かに重要な作品だろうと思っています。宮本武蔵というのは近世という時代の女性の象徴なんです。井上雄彦の『バガボンド』、あれは吉川英治が武蔵の時代と戦中戦後を重ね、男はどう生きるべきかを書いたものを劇画化したんでしょ。武蔵は感受性と才能において、中世から近世へという時代の転換期の一つの体現者だったろうと思います。最晩年の熊本での滞在というのはその兵法観を大成した時期ですから、貴重な5年間ですね。そのような意味で、五輪書はただの武道書ではなく、時代精神を表すものと捉えるなら大変面白い。絵画論は別にして、同時代の人々が宮本武蔵についてどう見ていたかを、物語として書いてみたいとは思っています。

—— 今回、米迎院の聖観世音菩薩像修復、もちろん浄国寺の谷汲観音像もそうですが、島田さんはわずか数年前まではほとんど忘れられていた松本喜三郎に、文化財保護というかたちで光を当てられたわけですが、喜三郎との縁をお話いただけますか。

島田：以前から喜三郎を知っていましたが、関心もありました。私の美術館に喜三郎の名人芸の片鱗を感じさせる、小さいけれど並々ならぬ作品が2点あるんですよ。美術史でいうところの「様式」は、つねにその達成度と、同時に表現としての限界を意味する概念ですが、喜三郎の魅力はそういうものから逸脱してゆくところにあるような気がします。実際に残っている作品をあらかた見まして、実に驚くほどの連続なんです。修復が始まるまでは、基本的構造がどうなっているか誰も知らなかった。しかし調べてみると、制作手法もですが、その天才的な造形力に本当に驚かされたわけです。たとえば内部はちょうちん構造で、からっぽ。作品の重さはほとんどが衣袋の重さですよ。それは夢のように軽い。その軽さには江戸の職人たちの持っていたいたかなアイロニーみたいなものさえ感じられるんですね。



—— やはり幕末から明治という時代の転換期と関係があるんでしょうね。

島田：先ほど宮本武蔵の話でも触れましたが、松本喜三郎もそうだと思います。武蔵は中世と近世の両方の限界と可能性を持って体現している、喜三郎もまた近世と近代との間の時代を皮膚感覚で理解している、時代の葛藤をいろんな意味で経験していた人間だったと思います。意外に喜三郎というのは大きな存在だったのでしょうか。大阪や浅草での興行には一日に万をこえる観客が入るわけです。流行は上っ面の社会現象ともいえますが、しかしそれだけの人間を集める力というのはたいしたもの。時代社会の感心と欲望を分厚く鋭敏に感じ取っていたのですから。

—— 米迎院聖観世音菩薩像の修復は喜三郎再発見の第一歩だと思うのですが、次なる展望はどのようなものでしょうか。

島田：文化財という視点で見ると、近世後期、近代前期の作品の取り扱いが違って厄介です。まず、遺物が多様で数も多い。近代と比べてもたかだか120年前ですから評価の基準も難しい。しかしまず多角的に残されたものを調べ直す必要があります。米迎院像も修復の問題で非常に悩んだんです。作品の経てきた「時間性」というのを磨耗を含めて考えるならば、そのまましておく方がいい。それでも放っておけば刻々と失われるもの、日々劣化していくものならば、それは最低限に留める必要がある。今回の結果としてはうまく出来ましたが、修復を通じて喜三郎のすこさを感じることもできました。ともかく修復に関しては不景気の時代に、短期間に多くの方々からの募金をいただいたことに感謝と喜びを感じます。要はそれだけの関心を現代に呼び起こす魅力が、松本喜三郎にあったということでしょうね。

——ありがとうございました。

(10月22日、於・島田美術館、聞き手：南島 宏)

編集後記

春日にある米迎院の「聖観世音菩薩像」が仏師清原さんの手によって、見事に復元修理されました。これは松本喜三郎彰会会の島田真佑さんをはじめ、多くの方々のご尽力とご寄付によって成し遂げられた事業で、単なる復元ではなく、修復保存という視点を堅持した、学術的にも非常に意味のある試みといえるものです。喜三郎は熊本市だけでなく、日本の宝です。現代美術館でも昔年から、アメリカ、ヨーロッパに渡る喜三郎と生人形の調査を進めています。次第に姿を現す、これまでの日本の近代美術史に埋もれていた、もうひとつの真実が顕されるばかりです。米迎院とともに、高平の浄国寺にも喜三郎のこれまた素晴らしい「谷汲観音像」が残されています。多くの方々にお話を聞かせていただき、喜三郎の天才性を堪能していただけたらと念願しています。

(学芸課長 南島 宏)

寄稿者紹介

兼城 昌山 (S.K)

Shozan Kaneshiro

新田町明屋を36年前に焼失した。エッセイで語った経験や風刺の鋭さに釘づけになった。3回も見直したことを思い出す。すごい作家である。

森山 淡草 (T.M)

Tanso Moriyan

源泉は書かという学生の議論。莫山の「美術は鑑賞者の方へこちらから近づかんといかん」という主張に簡単に賛成。文字を書かない源泉に因っては議論百出。はて...

田代 晃三 (K.T)

Kozo Tashim

自分は息付ものだから絵のこと以外はなるべく興味を持ち過ぎないようにしている。

学芸員紹介

本田 代志子 (M)

上通工場のフェンスも減り、3階の美術館も建て替えました。来年4月の引越が楽しみです。

坂本 顕子 (S)

行って来ましたアイト・モダン。建設コレクションの部屋に脱出。さらに無性に脱出。大失笑を覚えるべしです。

金澤 頌 (K)

学芸員には体力が必要なので、毎朝ラジオ体操することにした。さあ、みなさん一緒に。

富澤 浩子 (H)

アーティスト宮島達男氏との出会い。130までは恥を恥山かけ)とアトワイスを受けた。

